平成２８年度愛媛大学大学院入学式　式辞

「ご入学おめでとうございます。」本日の大学院入学式にあたりまして、愛媛大学を代表して皆さんのご入学を心より歓迎いたします。また、ご多用の中、入学式にご臨席を賜りましたご来賓の皆さま方に厚く御礼申し上げますとともに、ご列席いただきましたご家族をはじめとする関係の皆さま方にも深く感謝申し上げます。

今年度、愛媛大学大学院に入学されたのは、「医学系研究科博士課程」、および「理工学研究科・博士後期課程」の大学院博士課程に３５名、「教育学研究科・教職大学院課程」に１９名、「法文学研究科」、「教育学研究科」、「医学系研究科」、「理工学研究科・博士前期課程」および「農学研究科」の大学院修士課程に３２９名の、合計３８３名の皆さんです。この他、香川大学、高知大学と共に構成する「連合農学研究科」につきましては、来る４月１１日に２４名の入学生をお迎えすることになっています。

皆さんの中には５４名の社会人学生、１３名の海外からの留学生が含まれています。これらの方々におかれましては、言葉の問題、生活の変化など、学業以外の面において数多くのご苦労があることと思いますが、試練を乗り越えられ無事目標を達成されることを願っております。もちろん、われわれとしてもできる限りの支援をさせていただきたいと考えています。

さて、文部科学省から示された重点支援の選択におきまして、愛媛大学は「地域中核機能の強化」に向けて大きな舵を切りました。今年度に改訂した大学憲章におきましても「地域とともに輝く大学」を目標に掲げており、地域社会の構造改革あるいは産業振興のため、優れた若手研究者や高度の知識を持つ専門職業人を数多く育成していくつもりです。

幸い、愛媛大学には、地方大学としては異例の数の先端研究センターや地域密着型センターがあります。これはわれわれの大きな強みであり、そのような研究・教育基盤の中で、「先見性や独創性のある研究」を組織的に支援していくことこそが、愛媛大学の社会的使命であろうと考えています。

他方、研究不正行為の頻発を受け、研究者倫理の遵守という極めて基本的な理念が文部科学省のガイドラインに示されるという異常な事態が生じています。その中で、われわれ愛媛大学は、研究者を縛るのではなく、むしろ、やりたいことがのびのびとやれる研究環境を提供することが重要であると考えています。ご入学される皆さんにおかれましては、思う存分、研究に励んでいただければと思います。

さて、昨年度の入学式に続いて、今回も「Serendipity」についての話を少しさせていただきたいと思います。Serendipityとは、「セレンディップの３人の王子たち」というおとぎ話をもとに、イギリスのウォルポール伯爵により造られた言葉で、「偶然と才気によって本来探していなかったものを見つけ出す能力」を指します。例としてよくあげられるのがレントゲンによるＸ線の発見、フレミングのペニシリンの発見で、自然科学の進歩にはこの「Serendipity」がよく関わっています。

確かに、高分子タンパク質の質量分析に成功した「ソフトレーザー脱離法」の田中耕一氏、窒化ガリウムの結晶化に成功した「青色発光ダイオード」の天野　浩教授などのノーベル賞受賞者のほか、わが、地球深部ダイナミクス研究センターの入舩徹男教授の世界一硬い「ヒメダイヤ」も、すべて実験条件の変調の中で生じた、偶発的な事象にヒントを得た発見です。

そのような機会を生かせるかどうかは、研究者の注意深い観察力と先入観のない直感力にかかっています。ただし、その前提として、オーソドックスな手法の中で安定した実験を遂行できる基本能力が不可欠なのは言うまでもありません。最近、「Serendipity」の反対語として「ジャパニティ」という言葉が使われているようです。この言葉は「誰もがやっていることを追いかけて、必然のところで発見する能力」と定義されており、日本人研究者を揶揄した言葉とされています。でも決して卑下することはありません。何故なら、「Serendipity」で象徴される成果は、「ジャパニティ」による地道な研究の上に成り立っていると考えられるからです。

これから始まる研究生活では、まずオーソドックスな手法を完璧にマスターすることが必要です。これまでの歴史が如実に証明するように、オーソドックスの中の「ハプニング」に幸運があると信じ、不屈のマインドで研究に取り組んでください。研究科に入学された皆さんが愛媛大学大学院において素晴らしい成果をあげられることを心より期待し、私からの式辞といたします。

平成２８年４月６日

愛媛大学長　　大橋裕一